南都六宗の宗祖達について

孫　英　翼

南都六宗の成立は天平十九年（七四七）から天平勝宝三年（七五一）までの間になるといえるが、養老二年（七一八）に出た布告によると養老二年には既に諸寺に学団が有って五宗までは以前から成立されたことが窺がはれる。正倉院文書に勝宝三年に倶舎宗・法性宗・律宗が、勝宝四年に三論宗・花厳宗・成実宗がはじめにみえるので、少なくとも勝宝四年には、六宗が成立したことになる。勝宝年間までに成立された南都六宗は、もちろん宗と言っても信仰活動をする宗派でなく、各々の学団は学統を形成し、それぞれの教義を専門とする研究集団ないし学派とでも言うべきものである。然しそのいずれもその起源は大陸、半島からの来日僧によって移殖されたものが多いが、先ずその伝来された次弟に従がつて述べてみよう。

三論宗。第一伝とされる慧灌は高句麗の人でかつて入隋して嘉祥大師吉蔵に三論の旨を受けて高句麗から推古三十三（六二五）年に来日して元興寺に勅住し、三論宗の弘通につとめ三論宗の始祖と仰がれた。来日の年全国が大ひでりにおそわれ、天皇は慧灌に雨を祈らしめ、たちまち甘雨を降らせ、天皇はこれをたたえて僧正に任じた。第二伝とされる智蔵は慧灌に三論を学んだ後入唐し、帰朝後法隆寺に住して盛んに三論の講学を行なった。『僧綱補任』によると智蔵は「福亮の在俗の子なり」とあるが、福亮は狛（高句麗）の帰化人で、従つて智蔵は半島系の帰化人の後裔だと言える。第二伝とされる道慈は法隆寺智蔵に三論を受け、義淵について法相を学び、大宝元年（七〇一）に入唐し、養老二年に帰朝して大安寺に住し、書紀の編修、僧綱の任などに勤めた。その著に『愚志』一巻がある。道慈は『続紀』や『懐風藻』に大和国添下郡に生れ俗姓は額田氏と記されてあるが、『新撰姓氏録』によると額田氏は帰化人系なので、道慈は帰化人系の後裔だといえる。

法相宗・第一伝とされる道昭は白雉四年（六五三）に入唐し、直接玄奘にまない斎明七年（六六一）に帰朝した。入唐のことは一行十三人のうち道昭だけが『宋史』と『仏祖統記』に知られている。元興寺の東南隅に禅院寺を建立し、将来した経論と真身舎利が共にここに保存せられ朝廷の写経の際に底本として借出された。なお諸方に周遊し社会事業につとめ菩薩行を実行した。文武二年（六九八）大僧都に直任されたが、その翌々年七一歳で入滅し、遺言によつて火葬された。道昭は『続日本紀』によれば河内国丹比郡の人で俗姓は船連と記されているので百済系の帰化人の後裔にあたる。第二伝の智通・智達らは『書記』に、斉明四年（六五八）に新羅の船に乗じて入唐、玄奘に学んだとあり、また『仏祖統記』にも入唐の記事があるから法相宗を伝えたことは明らかだと言える。第三伝とされる　智鳳・智鸞・智雄らは『僧綱補任抄』に大宝三年（七〇三）勅命によつて入唐し、玄奘三蔵にあつて法相を習学したとあるが、大宝三年は玄奘の入滅したより三九年の後になり、また智鳳の弟子である義淵が僧正に就任した年なので、これはいずれも不審である。然し『伝統縁起』、『八宗綱要』、『東大寺具書』等によれば智鳳らは新羅より来朝するとあるから凡そ智鳳らは新羅の人で然も帰朝ではなし、このと

き初めて日本に来たことになり、従つて日本より入唐していないので、おそらく来日する前に入唐したものと推測される。第四伝の玄昉は義淵に学んだ後養老元年に入唐し、智周に受学して天平十七年に帰朝した。帰朝するとき経論五千余巻を将来し、聖武天皇に信任され、初めて紫衣を許され、僧正に任ぜられた。然し政治に関与して失脚し、筑紫観音寺別当で歿した。

俱舎宗。法相宗が伝わつた際付属して伝われたものとされている。伝来僧は法相宗と同じく道昭・智通・智達と言える。

成実宗。天武天皇の朝に百済の道蔵が来日して成実論を講じたのが伝来の最初とされている。道蔵は白鳳年間に来日し、養老五年元正天皇に「まことにこれ沙門の袖領、釈道の棟梁なり」と優詔されたといわれる。また道蔵は『成実論疏』十六巻を撰し、後世東大寺の学者は必らずこれを準拠したと伝える。二伝三伝は三論宗と同じく智蔵・道慈だと言える。

律宗。第一伝とされる道光は白雉四年（六五三）に入唐し律蔵を学んで天武七年（六七八）に帰朝した。なお『依四分律抄撰録文』一巻を著し、帰朝のとき道宣の『行事鈔』を将来した。第二伝とされる道璿は天平八年唐から来日のとき律宗の章疏を将来し、大安寺に住し、戒律の講究につとめた。第三伝とされる鑑真は天平勝宝五年（七五三）来日の前後五回の挫折と失明の犠牲をはらつて唐から来日した。即ち鑑真来日で初めて律宗が宗としての戒壇を築き戒法が具わつたのである。

華厳宗。第一伝とされる審祥は新羅からの来日僧で大安寺に住した。時に金鐘寺の良弁が厳智の勧めによつて審祥を華厳講師として再三請じたのが華厳宗伝来の初祖とされる。第二祖の良弁は義淵に受学し、金鐘寺を建てて、天平十二年初めて華厳宗を起し、審祥を宗師として講宣した。東大寺造営には造東大寺司となつて心血を注ぎ宝亀四年僧正となつた。然し良弁は『元亨釈書』によれば近江国志賀里の百済氏とあるので帰化人の後裔であることが推察できる。

以上に述べたように南都六宗の宗祖達を定めるためにその成立と伝来された宗祖達について簡略ながら一人一人を宗ごとに考察してみた。それによつて窺がわれるのは前にも述べたように伝来された宗祖達が半島や大陸からの渡来僧が多いことに目がそそがれる。それは古代国家としての学問の受容期として外来の先進文化をそのまま摂受するのは古代国家の一軌といえるのであろう。従つて伝授した国即ち橋渡しないし日本の文化創造に夥ただしく役割したのが半島の三国または半島からの帰化人達とその後裔だといえるのである。即ち六宗初祖のなか高句麗・百済・新羅の三国からの渡来僧が各々一人ずつ三人と、さらに帰化人の後裔が一人になつていて、但、律宗の道光一人だけを除いて六宗をほとんどしめているのである。それをまだ初伝から三伝、四伝まで全般的に考察すると伝来僧十六人のなか韓半島からの渡来僧が六人、またその帰化系の後裔が三人、大陸からの渡来僧が二人で、すると残りが五人になるので、その五人は伝記不明のため確証はしがたいが、初期の留学生、留学僧のなかで帰化人氏族がきわめて多いのであつたことからしてもおそらく残り五人も韓半島系帰化人氏族だと思われる。日本仏教の青年期だともいえる南都仏教は是の如く韓半島系の人が圧倒的に占めている。即ち南都六宗が成長した土壌の上に最澄、空海をはじめとする日本仏教の今日の発展をもたらしたものと思うのである。

（註は省略致します）